

DVD 鑑賞メモ

桑 原 隆 行

メモが出てきた。律儀にそれぞれの映画の印象、台詞、他諸々を備忘録みたいに書き残していたものらしい。忘れないために書いておいたものの存在自体を忘れていたのだから世話がない。日付がないので、書いた時期は不明である。いずれにせよ、集中して毎日 DVD を観て過ごしたある年の夏の幸福な自分がいたのだと想像してみる。DVD 三昧の夏だったと仮定してみる。それが事実かどうかは問題にしない。私にとって、その仮定は、ここでの文章をスタートさせ最後まで導く起動、牽引装置のようなものなのだ。メモでは作品に番号は付されていないけれど、ここでは番号を付す。あらかじめ断っておくと、引用された台詞は必ずしも正確ではないかもしれない、並べてあっても必ずしもつながりのある台詞ではないこともある。私としては過去のメモを書き写すだけでは面白くないので、現在時の心情、コメント、回想、中古店に買い取ってもらった DVD の処分価格（つまり「買取価格・・・円」という表記がある DVD は現在所有していないことを意味する）等々を小さめの文字で書き加えることにする。「記述なし」は何のメモも書かれていなかったということを意味する。それでは、開始。

1 深作欣二監督『恐喝こそわが人生』

ストップ・モーション映像が多用され、それが場面転換に使われている。回想はモノクロ。女と過ごす箱根の別荘。

*今年の夏はちょっと別荘で、などと言ってみよう。

『必殺 4 恨みはらしす』

浮浪者で闇の殺し屋集団。子供嫌いの中村^{もんど}主水は自由人気質のはみ出し者。家では姑と嫁さんにいびられ、やりこめられっぱなし。陰間（「騒^{かげま}ぐなっているの」「そんなのありかよ」）。

*この二作は深作欣二監督シリーズ 1 DVDBOX に入っていた。BOX の買取価格 1400 円。陰間は「江戸時代、まだ舞台に出ない少年の歌舞伎俳優。また、宴席に侍って男色を売った少年。若衆。」（『言泉』）

2 ニキータ・ミハルコフ監督『愛の奴隷』

*記述なし。好きな映画だ。「愛の奴隷」、このタイトルに惹かれて購入したのは間違いない。この前、奥村チヨ「恋の奴隷」をカラオケで歌った。ミハルコフの映画については他の作品も含めてちゃんと書きたい。

3 マヌエル・ゴメス・ペレイラ監督『抱きしめたい!』

ベネロペ・クルスがビートルズの追っかけ娘役。パリの名所でのキスシーン。クリヨン・ホテルのバルコニーからの景色。列車の中、採血車の中、まぐさ置き場、（パラシュートで降りてきた彼と）野原で、劇場のトイレ、ワイン・セラーでセックスが行なわれる。「この恋はロマンチックで打算抜きよ、運命的な出会いだったから特別な」「夫は早漏だからだめよ」ピエロに扮して、「危いわね、子供じみた男は遊ぶことを止めないわ」トランクの中に恋人を入れて。レストランのトイレ。平凡さの裏側の特別な情熱。「大事なものはセックスへの欲望よ。行為はただの運動だけど、欲望は知性の産物なの」

*欲望の噴出は場所を選ばないということか。上に列挙された中に、読者諸氏が試したい、あるいは試した場所はあるだろうか。クリヨン・ホテルのバーで飲んだのはいつのことだろう。

4 ジャン・ドラノワ監督『しのび泣き』

パリで遊び歩いたこと、「それも三か月も続けば退屈してしまうわ」取り戻せない過去。現実に敗北する幻想。才能の消費。

*退屈は倦怠という言葉に置き換えてみよう。鏡を倦怠ゆえにフレームの中で凍りついた冷たい水と詠うマラルメの詩は美しい。《Ô miroir ! / Eau froide par l'ennui dans ton cadre gelé [...]》(Larousse des Citations, Larousse, 1975, p.362.)

5 ロマン・ポランスキー監督『戦場のピアニスト』

「あなたって魅力的な方ね」「祖父は黄痘になり、恋人に捨てられた」

*息子が小さい頃弾いていたピアノは売り払って、今はない。

『ナインスゲート』

古本の稀覯本を見つけて商売にする男。本の探偵。依頼を受けた『九つの門』をめぐる事件が起きる、版画の予言通りに。残存する三冊の謎。パリ、セーヌ河畔。

サン＝ルイ島？

*出演のジョニー・デップはこの映画の撮影地ロンドンから自家用飛行機でパリにヴァネッサ・パラディに逢いに来ていた、と映画監督パトリス・ルコントは述べている（そのうち拙訳が出る予定の『映画は止める』を参照のこと。）買取価格50円。

6 ギャスパール・ノエ監督『アレックス』

*記述なし。その理由は分からないではない。ギャスパール・ノエの映画は『カルネ』『カノン』など独特の暗めの画面で、グロテスクでスキャンダラスで挑発的、胸糞が悪くなるような映画なので、言葉にしてまた不安や暗部と向き合うのを躊躇してしまうのだ。『アレックス』は出演がモニカ・ベルッチ、ヴァンサン・カッセル。

7 ケン・ローチ監督『スウィート・シックスティーン』

イギリス、どこかの港町。「陰気な町だ」（舞台はグリーンノック）。母親は刑務所。やりきれない青春。閉塞感ともがき。湖のほとりのトレーラーハウス。盗んだヤクを売りさばくリアム。「死んでも家を買う気か？お前は本物のバカだ」（息子は母親の愛を求めすぎてはいけない、特に母親が男に夢中になっているときは。）

*ケン・ローチの映画は好きだ。BOXも含めて何枚か所有している。基本的には社会派映画ということになるのだろうけれど声高に主張がなされているわけではない。抑制が効いていて、ユーモアも詩情もある。それが逆に感動を生む。

8 ニルス・タヴェルニエ監督『エトワール』

パリ・オペラ座のダンサーたち。完璧な自己表現を実現するための自己管理と自己抑制。修道女のような。

*ある時期、私にとってオペラ座前は恰好の待ち合わせの場所だった。買取価格570円。

9 カトリーヌ・ブレイヤ監督『本当に若い娘』

Une Vraie Jeune Fille

ケースに書かれた「アリス14歳。オトナになる前の、密かな夏」という惹句に目を奪われる。自分のヴァギナにスプーンを入れる、愛液で濡れた指で鏡に名前を書く、すべてがエロチックな妄想の材料。ヴァギナをミミズに弄ばれる夢。樹液＝精液。

*サドの例に顕著に見られるように、現実の性的欠如、飢餓が過激な性的妄想の温床であったりする。

10 フランシス・マンキウィッツ監督『回転扉』

Les portes tournantes

サイレント映画時代の映画館のピアニスト。現在と過去。回想の時。

*この映画は記憶にない。どこかに紛れ込んでいないか探してみる。

11 ジョン・ハーツフェルド監督『2 days』

二人の殺し屋。「ボキャブラリーが貧困すぎる」「好奇心は身を減ぼすぜ」落ちぶれた映画監督が犬の散歩途中に「あんたは観客を無視してたな。駄作ばかりだったものな」と文句をつけられる。かつらのズレを指摘。ピストル片手にパスタ作り。純日本風マッサージ店。

*出演のジェームズ・スペイダーがいい。『セックスと嘘とビデオテープ』『クラッシュ』『ぼくの美しい人だから』の彼もまたいい。『クラッシュ』を覚えてくれたぼくの美しい人は今どうしているだろうか。

12 レティシア・コロバンニ監督『愛してる、愛してない』 A la folie...pas du tout

ストーカーじみた恋愛妄想の女と、彼女の妄想対象の医師との二重の物語が最後で重なる。「毎日、薬を飲んでいれば大丈夫です」（こう言われて退院した女の病室で発見される、壁に無数の薬のカプセルで描かれた男の姿。）

*オドレイ・トトゥが異色の役柄を演じている。

13 アレハンドロ・アメナバル『テシス 次に私が殺される』

「映像における暴力」というテーマで論文準備中の女子大生が殺人テープを目撃する。特定されたビデオカメラを持つ男子学生。

*買取価格2100円。結構いい値段だ。

『オープン・ユア・アイズ』

「教えてくれよ、女を口説くコツを。女に飢えているんだよ」陽光あふれる街。緑したたる季節。悪夢の連鎖。「ここは悪夢よりひどい」ベネロプ・クルスの乳房。

*二作とも、スペイン映画のDVDを買い集めていた時期に入手したものである。アルモドバル以外に手を広げていこうと意欲的だった。

14 トッド・ソロンズ監督『ストーリーテリング』

恋人の作品を黒人教授にくそみそに酷評されたヴァイ。

*DVDケースには「観る覚悟はあるか！？」と挑発的な言葉が書かれてある。

15 ウェス・アンダーソン監督『天才マックスの世界』

ちょっと風変わりな青春映画。

*この作品をきっかけに、『ダーズリン急行』『イカとクジラ』『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』『アンソニーのハッピー・モーター』などウェス・アンダーソンの他の映画にも注目するようになった。

16 マーティン・スコセッシ、フランシス・コッポラ、ウディ・アレン監督『ニューヨーク・ストーリー』

『ライフ・レッスン』 プロコル・ハルムの音楽。アトリエ。「どうしたのかな、急に足にキスしたくなった」ロザンナ・アークエットのパンティー姿。「実は助手を探している。給料付きの人生勉強だ」とは画家ライオネルの誘い文句。

『ゾイのいない人生』 昔フルートが禁止されたこと。「フルートの音があまりに美しくて、処女が皆惑わされてしまったから」 高級ホテル。

『エディプス・コンプレックス』 口うるさい母親。「どうして外で食venaきやいけないの、雨が降ってきたらどうするの？」 消えてくれればいいと思っていたら、奇術の箱に入り本当に蒸発してしまう。しばらくはストレスから解放されて、性生活も快調、大胆。しかし、母親が空に現われ連日、彼の知られたくないことを喋りまくる。

* 何だか、また観たい気になってきた。売り払ったりしていなよな、確か。（その後ちゃんと見つかりました。）

17 フェリーニ監督『そして船は行く』

「夕焼けは神の描く絵なのだ」

* フェリーニの映画に関しては、いつかまとめて語りたい。いつかというその日が来るかどうかは分からないけれど。

18 パトリス・ルコント監督『歓楽通り』

Rue des plaisirs

河畔のピクニック（幸福感から悲劇への暗転）。シラノ・ド・ベルジュラックのような報われない尽くす愛。

* ここでは沈黙を選択する。好きな女性の前だと口がきけなくなる男みたいに。

19 クレール・ドゥニ監督『ガーゴイル』

出演はヴィンセント・ギャロ、ベアトリス・ダル。

パリ、ノートルダム寺院。前を通り過ぎる日本人らしき姿。上から飛んで行く緑のスカarf。閉ざされた女の誘因力。セックスの最中に殺人衝動に捉えられてしまう性癖を持つ男女。新妻を殺してしまうかもしれない恐怖心から、射精直前でセックスを止めて、トイレに駆け込んで自ら慰める男。監督インタビュー。「『ママと娼婦』のように素晴らしいセリフにあふれた作品もあります。あの映画はあのセリフがあってこそこの作品です。セリフが映画を見事にひきたてています」

* 買取価格180円。

20 ジャン・ユスターシュ監督『ママと娼婦』

行為より言葉の方がはるかに過激で衝撃的。性的な話題。本来プライベートなセックスの話題が台詞となって画面で話されるの聞くことの恥ずかしさと驚き。（拒否

反応を示す人。真似する必要はないけれど、何でもありえるのだということを受容。普通は親密なカップル同士で性の話題を率直に話せるのがいい。）サン・ジェルマンの二つのカフェ（ドゥ・マゴとフロール）。街の様子。（大胆な台詞の一方で生活観や人生観が語られていることに注意。そこがいい。様々な感情や話、出来事の混在が人生なのだから。）

アレクサンドル（同棲。自由度。言葉の過剰。その一方で他者の話に関心、それが女を惹き付ける。ヴェロニカが自分の性生活を話してしまうのも、彼の聞き上手のせい。）

友だち（予め用意してないと行動できない。シナリオを用意して、それに気をとられるあまり、ナンパしても失敗。）

（引用の多さも楽しい。）ベルモンドやミック・ジャガーのこと。セックスの好みを尋ねるアレクサンドル。昔の男のことを話すヴェロニカ。女体を称える言葉。相性の問題。「サルトルがいる。彼は大酒飲み。アル中のたわごとだ」「恋人の数と美は反比例する」「流れる時や人生が出会いや別れを支配する」

サシャ・ギトリと最初の妻の話。別れるには最後の一言が必要なこと。黙って姿を消されると相手に深い傷と痛みを残す。嫉妬。「僕といるより楽しそうだ」 女性が性的な欲望をはっきり口に出すこと。

ヴェロニカ（浮気性。アレクサンドルが深く関われる相手になっていく。アレクサンドルとマリーの同棲生活に介入・闖入。）「この世で一番幸せな男性よ。二人の女に愛されて眠る男」 やりこめられるアレクサンドル（一面的な見方しかできないナルシスト。）

* シナリオを授業で用いたことがある。あまりうまくいかなかった。責任は私にある。

21 ルキーノ・ヴィスコンティ監督『若者のすべて』

出演はアラン・ドロン、アニー・ジラルド。大家族制度の苦勞、圧力、悲劇。

『地獄に堕ちた勇者ども』

* 記述なし。

『熊座の淡き星影』

ジュネーブ。湖畔。アヌシーやリヨン方向を示す道路標識。「私の思い出に嫉妬してる」「そうさ、この屋敷の魔力に君を奪われそうで心配なんだ」 古い館にまつわる記憶。

* アヌシーもリヨンも忘れられない。

22 廣木隆一監督『不貞の季節』

緑美しい中にある一軒屋の内部で行われている狂態と、それを描写する作家。後ろ姿を映すロングショット

が美しい。海の家。

*買取価格850円。

『君といつまでも』

監禁される女。夢の中のような色調。

*買取価格180円。

『東京ゴミ女』

好きな男の出したゴミ袋を拾ってきて、中身を調べる女。男の生活、内面を理解しようとする愛の形。出てくる女の影、性交の痕跡。

*買取価格470円。

『800two lap runners』

体育館でのエッチが発見される。「前代未聞の不祥事だね」「ちゃんとコンドームはしてましたけど」 水の中から見上げる外の光景のエロチックさ。(DNAに蓄積された気持ちのいいことを追体験したいという願望=セックスの遠い記憶・遺伝子。) 海辺の駅舎。屋上で待ち合わせ。ラブホテルでカラオケ。橋を駆ける。

『魔王街』

*記述なし。買取価格180円。

『蜜に濡れる女』

深夜のストリップごっこ。過去と現在をショット変換で描く。結合部分が隠れるような映し方(テーブルなどを前面に置く)。

*買取価格50円。廣瀬隆一監督の映画に惹かれていた時期があった。

23 青山真治監督『チンピラ』

メロンを食うボスと子分。ローカル線。

*買取価格1330円。

24 三池崇史監督『牛頭(ごず)』

兄貴分尾崎の奇行、妄想(やくざを殺すためのヤクザ犬、ヤクザカー)。ヤクザ処分場。

黙っていても茶わん蒸しが出てくるおかしいカフェ。すぐ吐く。何百枚も10円玉を積み重ねて電話する男。ねじれた妙な世界に入り込んでしまう。火野正平演じる男。「与作歌える?」「カレーライスとハヤシライス一緒に食べちゃったりするでしょう?」「おばあちゃんの名前キリコでしょう?」「座っているのに、たっているものは?」「時間」「ジバンシーの穴あきパンツだ。女にはかせてそのままやるんだ」牛乳瓶に自分の乳を搾りだして、牛乳にしたてる女。

*このメモでまた映画が観たくなってきたのだが、それは叶わない。というのは、買取価格760円。

『オーディション』

*記述なし。買取価格1420円。

25 クシュシュトフ・キエシロフスキ監督『アマチュア』

誕生した娘を撮るためにカメラを買った男。会社から祝賀会の映画を撮るよう命じられる。撮影に熱中するあまり、ぎくしゃくしてくる夫婦の関係。妻の精神不安定。夫は言う、「男には平穏な生活以上のものが要る。家庭よりも重要かも」

『偶然』

同一人物の二つの(三つの?)物語。列車に乗り込めたか、乗りそこねたかの違いで生起する二種類(三種類?)の話。田園風景(連想・ショパン)。

『終りなし』

画面の共通した色合い。やわらかくくすんだヴェールがかかったような感じ。曇り空を通してくる光のような印象。裁判所(『トリコロール』を思い出させる)。引退間近の弁護士が難しい政治的案件を引き受ける決心をする。「最後に一花咲かせるか。あだ花でも・・・」黒犬。「カミュの『転落』の弁護士が好きだった」

『傷跡』

田園を走って林に集合する車。

*キエシロフスキは『トリコロール』の監督だ。彼のDVD-BOXはすべて持っている。これは手放せません。

26 イ・ヒョンスン監督『イルマーレ』

*記述なし。買取価格370円。

27 コッポラ監督『ドンファン』

手首に香水。21歳ですでに1000人の女と性交したと、こともなげに語るドンファン。「どんな女も私の腕で歓喜する」「女は解かれるのを待つ謎だ」「女の肉体から蜜が流れ、知ったばかりの愛の悦びに陶酔する姿を見たか?」「女の体に舌を這わせるだけで、完璧な満足感を与えられるか?」「耳で囁くだけで女の体をふるわせ、快楽にもだえさせられるか?そして絶頂に導いてやれるか?」「私は千通りの愛を学んだ、女の心を愛する方法を。彼女たちがなつかしい、優しさに満ちた五月の朝のようにいい美しい美女たち」

*一度でも口にしてみたいような言葉の数々に今でも魅了される。

28 根岸吉太郎監督『ひとひらの雪』

*記述なし。秋吉久美子のヌードを期待して買ったのは間違いない。買取価格940円。

29 ウディ・アレン監督『スコルピオンの恋まじない』 「よく動くヒップだ」「休みなく躍動してるよ」

*ウディ・アレンのは大体持っている。自分にも他者にも向けられる諸諱精神、皮肉でおしゃれでロマンチックだったりする会話、スマートな展開等々が好きだ。

30 トム・ティクヴァ監督『ヘヴン』

始まりと終りのヘリコプター。天空に消えていく。

『ウィンタースリーパー』

雪。一つの交通事故がきっかけとなって、絡まり交差し結びついていく人間たちの運命。

『ラン・ローラ・ラン』

『エス』の役者モーリッツ・ブライプトロイ出演。偶然の連鎖を作る必然。ローラが走りだした後の、すれ違いが招く人々の運命。ちょっとした時間のずれで変わった三つの運命、物語、結末。何かが終わった後で、成就した後ではじめて、その始まりが何だったかが分かる。何々だったから何々の物語。

*ファスビンダーやヴェンダース以外のドイツ映画を探しているとき発見した。『ヘヴン』が英語ヴァージョンであることが示すように、今はティクヴァ自身、英語での制作のほうにシフトしているみたいだ。そういえば、『パヒューム ある人殺しの物語』も彼の映画だったね。

31 マノエラ・デ・オリヴェイラ監督『ノン、あるいは支配の空しい栄光』

*記述なし。

『家宝』

川の景色。「彫刻のように美しい背中もあるわ、思わずワインを注ぎたくなるような」

*オリヴェイラ監督の映画は不意に息を呑むほどに美しい映像が現れてたりして、心地よい驚きをもたらす。彼の映画のタイトルにも永遠（『永遠の語らい』『コロンブス永遠の海』）という言葉が使われているのだが、その美しい一瞬が永遠につながっているような印象を受けるのだ。

32 ジャン＝ピエール・リモザン監督『ノボ』

郊外の駅。

*記憶違いかもしれないが、有名モデルを起用というので話題になった映画ではなかったかな。もしそうだとすれば、そのゴージャスな肢体を見たいという真っ当な理由で購入したのだと思う。

33 小津安二郎監督『麦秋』

（文学的。文学作品を読んでいる感じがしてトリュフォーを連想した。）鎌倉の大仏前。踏み切りで列車が通

過する間、空を眺めるシーン。秋田弁でふざける二人（映画『踊る大捜査線』を連想した。）印象派の絵のような海辺の女二人。「いさむちゃん、どこへ行くの?」「うんこ」 家族写真撮影。

『晩春』

北鎌倉の駅。海辺のサイクリング（印象派の絵のようだ。トリュフォー『突然 炎のごとく』のシーンを思い出す。）女友達同士のずけずけ言い合う関係が現代的。熊太郎という名前をめぐる話題。子供の描き方（トリュフォーを連想）。

『早春』

朝の出勤風景・列車。バー「ブルーマウンテン」にかかるパリのポスター。江ノ島ハイキング。マージャンで杉山の近くに寄りそう「金魚」。お好み焼屋でのデート、岸恵子のキスシーン。サラリーマンの悲哀、愚痴、嫉妬（金魚つるし上げ）。川景色。

『秋刀魚の味』

（皆、姿勢がいい。）工場の煙。野球（大洋・阪神戦）。「そいつがひょうたんなんだよ。とうに死んだと思っていたんだが」「いやあ、あんなやつはなかなか死なないよ、死なないんだな。殺したって死にませんよ」「あの方の薬はどうしてる?」（若い奥さんをもらった男に対して、強精剤のことを。現代ならバイアグラ。）「こいつは孫みたいに若い女房をもらいましてね。ここだけの話、それが結構いいらしいですよ」 死んだことにされている堀江。お金のことで喧嘩する兄夫婦。冷蔵庫・ゴルフ。電車。アパートの洗濯物。

『お茶漬の味』

市電。パチンコの話。女友達同士で修善寺温泉に遊びに行く口実を相談。列車。夫を「鈍感さん」と呼ぶ。鯉相手にふざけた発言で喜ぶ女たち。野球観戦で女連れの夫を目撃。「カロリー軒」というトンカツ屋。「甘辛人生教室」というパチンコ店で戦友と偶然再会。大磯駅。ラーメン。汁かけごはんをめぐる口論。深夜のお茶漬、和解。

『彼岸花』

東京駅。娘の結婚話をする男たち。会社の窓掃除の光景。「年頃の娘がみんな嫁さんに行っちゃっちゃ、世の中淋しくなるよ」「君みたいなきれいな人が変な奴の所に行く必要ないよ」 おしゃべりな京女。箱根。結婚観をめぐる父娘の対立。いざとなると頑固な父親。女友達同士の、相互扶助、トリック。「矛盾の総和が人生だと言ってる学者もいる」

『戸田家の兄妹』

「今日はばかにお酒がうまかった」とか言っているうちに倒れ、死亡。友人同士でその死んだ父親の話をさかになに飲む（勝手に本を売りはらったこと、神宮の始球式のこと。）「人間なんて、妙なことで泣けるもんだよ」遺産の書画骨董を鑑定する人たち。蒲団縫い。「ほくの鼻くそだよ」（顕微鏡を見せて）。父親を亡くして長男夫婦宅に同居する母娘の苦勞・遠慮。次に長女宅。そして、二人だけで鵠沼の別荘へ。（⇒芥川龍之介）

『出来心』

（サイレント。）浪花節の会場。空の財布のたらい回し（次々拾って中を見る客たち）。体を掻きだす連中。「この辺に泊まれる宿はないでしょうか」「大有名名古屋だ」すねを棒でたたいて父親を起こす子供。バケツ水で顔を洗う。「どうでえ、可愛いこと言うじゃねえか」「ガラクタなとっつあん」「しかし、世の中なかなかひねくれたもので」「近頃、めきめきとモダンになったじゃねえか」

『父ありき』

金沢。男たちはみんな帽子。修学旅行（鎌倉の大仏）。事故の責任を感じて辞表。列車。川釣り。

*小津安二郎に関しては、今ここで選択すべきは雄弁な沈黙のみ。

3 4 塚本晋也監督『六月の蛇』

心の相談室（電話カウンセラー）の女の許に盗撮写真が送りつけられてくる。

*メモだと面白そうな気がするけれど、全然覚えていない。

3 5 ゴードン・チャン監督『ファイト・バック・トゥ・スクール』

突撃前に一人、リップクリームを塗る。「わしの拳銃が盗まれた。使ったことはない。でも背中を掻くのには重宝で」スパイの求刑。「あれをちょんぎるんだよ」「切るってどれくらい？」「サイズによる」フセインのTシャツ。「部屋にあるエロ本も処分して」気をきかせてコンドームを。「二つあるから一つやる。超薄型でいい感じだ。やさしくしてやれよ」見つかったコンドームをガムだとごまかして口に入れてしまう。そしてふくらます。笑いと恋。

『ファイト・バック・トゥ・スクール2』

「失恋したんだ」「お前に女いたか？」「文通相手だ。3年も続いていたのに、返事がこなくなった」「どうして？」「写真を同封したからだ」「それじゃ自業自得だ。よく、そんな大胆なまねができたもんだな」「大胆？送ったのはお前の写真だぞ。そうだ、お前の写真のせいで返事がこないんだよ」「もっと明るいもの読んだら？」「例えば？」「例えば、北条司のシティー・ハンターとか、

鳥山明のドクター・スランプあたりはお勧めですね」ボールを突き破るコブシ。キスの前にリップクリーム。「顔の特徴は？」「品がない」

*とにかく笑いまくり。

3 6 スタンリー・キューブリック監督『バリー・リンドン』

胸元に隠したりボンを取らせる。野外の踊り。アイルランドの自然。「賭博術の権威となった」借金回収はバリーの剣の腕。「その剣の練達と勇気がふたりの企業を繁栄させた」「間もなく彼女がバリーの人生に占める位置は、部屋の見事な敷物や絵画と同様の優雅な背景にすぎなくなった」映像美。「医者が来た。だが、暗い運命に対しては無力だった」

*「優雅な背景」、いい言葉だ。

3 7 トニー・リチャードソン監督『トム・ジョーンズの華麗な冒険』

「アダムもりんごを食べたように、彼も誘惑には弱かった」

*同じ名前のこちらは歌手だが、トム・ジョーンズのCDは売っちゃたなあ、確か。

3 8 ジャック・ドレー監督『恋の病い』 Maladie d'Amour

出演ナスターシャ・キンスキー。ボルドー駅。犬の名前がレヴィ・ストロース（哲学者のじゃなくて、ジーンズの名前から）。若い娘との恋。「放火しておいて、消火を手伝おうとする犯人の気分だ」

*普通の病気にさえ毛嫌いされているのに、恋の病いはまして接近の気配もない。歓迎する用意も、罹患したら治療拒否する覚悟もできているのだけれど。

3 9 ベルナルド・ベルトルッチ監督『魅せられて』

出演ナスターシャ・キンスキー。イタリアの美しい自然と官能の目覚め。「きみは道徳を尊ぶタイプ？つまりセックスを汚らしいものだと思う？」「美は人を感傷的にする」中年女にコンスタンの『アドルフ』を贈る若い男。

*「魅せられて」と言うと、ある年代の人たちは、ジュディ・オングの同名の歌を思い出すかもしれない。これは私のカラオケ・リストには入っていない。

4 0 アンドレ・ファルワジ監督『レッスンC』

出演ナスターシャ・キンスキー。脱バージンをめざす女生徒たちの作戦。

*脱帽。

4 1 アルベルト・ラトゥアーダ監督『今のままでいて』

出演はナスターシャ・キンスキー、マルチェロ・マストロヤンニ。フィレンツェ。「手は感情がでるわ。はつきり。他の話をしながら私を欲しがってた」「男は便宜上、女は好奇心で結婚するが、両方後悔する。唯一の利点は秘密が増えることだ」「お尻を噛んで」母親の場合も娘の場合も、恋人が映画館から先に出てそのままいなくなってしまう。

*39の『恋の病い』、40の『魅せられて』、41の『レッスンC』もそうだが、なぜか急にナスターシャ・キンスキーの出演作を見たくて購入したのだった。

42 フェルナンド・メイイレ監督『シティ・オブ・ゴッド』

*記述なし。観ていないのかもしれない。観るつもりで先にノートにタイトルだけ書いて、それっきりということがあるので。

43 エドワード・バーンズ監督『サイドウォーク・オブ・ニューヨーク』

「傷を癒すのはあたらしいオッパイさ」「タマに香水つけてる男なんて」「君が何も感じないとすれば、僕はさじを投げる。君の魂はビタミン不足かも」

*名前だけは誰でも知っているような都市を舞台にした映画には何故か惹かれる。だから、最近のウディ・アレンの都市シリーズとでも呼びたい『それでも恋するバルセロナ』『ミッドナイト・イン・パリ』『ローマでアモーレ』『恋のロンドン狂騒曲』、どれも好きだ。

44 ルイス・マンドーキ監督『ぼくの美しい人だから』

（原題はホワイト・パレス。ハンバーガー・ショップの名前。）掃除機をプレゼントされて怒りだす。

*先の方で書いたように、ジェームズ・スペイダー出演映画。スーザン・サランドンが相手役。

45 ペドロ・アルモドバル監督『バチ当たり修道院の最期』

現世の欲望に忠実すぎるはやめちゃん修道院。ヘロイン。官能小説好きの修道女。「修道院に虎なんて驚いて当然よ」「噛まれたりしない？」「あなたが噛まなければね」

『グロリアの憂鬱』

マドリードの剣道場。吐いた孫に、「不幸は急にやってくるのさ」隣の売春婦クリスタルが鞭を借りにくる。代わりの太い棒を見て、客のポルノ作家が「遠慮しとくよ」と言う。「アレの相談なら私にしてね。手ほどきしてあげるから」作家夫婦。盗み癖の妻。「私の整形用の貯金に手をつけないでよ」「掃除婦は創作に役立つ。カポティーも午後は掃除婦と過ごした」青空を背景に

した影絵のような場面。

『トークトゥーハー』

*記述なし。でも、これは観てる。アルモドバルを観忘れるわけがない。

『私の秘密の花』

脱げないブーツ。思い出と同じようにきつく張り付いている。ブランディー入りコーヒー。

*タイトルに何か官能的なものを想像したのは確かだ。アルモドバルはとにかく気になる映画監督の一人。ほとんどの作品を持っている。

46 ビガス・ルナ監督『マルティナは海』

海辺の街。パティオ風中庭での食事。つるされた白のパンティー。神話のように洞窟で抱き合う。「愛するから愛さないへの長い道のり、それは誰にも分からない。いつ、どのように進むのかを」「稼げない男のどこがいい？」「物語を話せるわ」物語ではない現実にくんざりし始める夫。海に出て失踪。ウリセス（ユリシーズ）？

*海辺という言葉にも惹かれる。

『裸のマハ』

「裸のマハ」の絵。女性の秘密の三角の茂みに三角形のグラスがオーバーラップ。フランスの流行だと言って下の毛を抜いてゴヤを驚かせるアルバ公爵夫人。「まだ私の体が好き？」

*きつとご明察の通りで言うまでもないことだろうけれど、官能性が感じられる映画が好きだ。

47 ポール・トーマス・アンダーソン監督『パンチドランク・ラブ』

恋人が出来ない弟バリー。いつも7人の姉たちのからかい的。セクシー・ギャルとおしゃべりしませんか、に電話するバリー。プリンを買い集めてマイルを貯める計画。女に不器用な彼が手に入れた恋。リナをハワイに追いかけて行く。「仕事なんかない。君に会いに来た」

*麵ちゃんこ亭の瓶入りプリンを急に思い出しました。

48 アレクサンダー・ペイン監督『アバウト・シュミット』

保険会社を退職したシュミット氏。日増しに募る不満の数々。

*出演ジャック・ニコルソン。私は定年まで8年。

49 エリック・ロメール監督『コレクションする女』

*記述なし。

50 フェルナンド・トルエバ監督『カジェ54』

音楽を撮る。

*残念ながら、記憶にない。

51 テオ・アンゲロプロス監督『1936年の日々』

ギリシアの光。白壁。ロングショットの多用。広がり。海辺の政治談義。女たち（プルーストの世界を彷彿とさせる）。

『狩人』

雪原を映す固定カメラ。狩人たちが遠景から前景へと近づいてくる。ホテルに運び込まれる死体（カメラのゆっくりとした静かな移動）。廊下の固定映像。構図の美しさ。ティンフェア山。湖面を渡る船（ゴダールの映像を連想）。

*アンゲロプロスはBOXで持っている。

52 ラッセ・ハルストレム監督『恋する男と彼の彼女』

淋病に罹った男。自堕落な生活をしていた新聞配達員の男が恋に目覚める。配達先の女に新聞に挟み込んでラブレターを送る。チュニジアへの旅。トイレ探しで右往左往。（ベッドでペニスを覗かせて、口上を真似て、「見てくれるだけでいいよ、一日中立ってる上物だよ。買う気はないの？」）

『気取り屋』

若い男たちは軍隊。若い女達だけの工場に赴任してきた技師。その気があるそぶりでは彼をからかう女たち。水辺の女たちを覗き見。ある時期から急にもて始めるのだが、かけもちが続かなくなる。時間調整が不可能。女たちががち合う事態。雄鳥の能力にも限界。みんなが性病仲間。最後に男は女たちに復讐される。

*ハルストレムは『マイライフ・アズ・ア・ドッグ』や『ギルバート・グレイブ』の監督だが、ここに紹介した二作のような初期作品も面白い。

53 ゴダール監督『女は女である』

自作を引用。「早くしてくれ。テレビで『勝手にしやがれ』を見たいんだから」口をきかないと宣言した二人。本を持ってきては、そのタイトルを示して無言で罵る。引用の快楽。「元気？」と聞くジャンヌ・モローにベルモンドが「ジュールとジムは？」、すると「雨の忍び逢いよ」という返事。「何の本？」撃つ真似と銃声。「ああ、ピアニストを撃て、ね。」ジュークボックス。アズナブールの歌。

*沈黙を選択する。

54 リチャード・レスター監督『ナック』

「ナンパの仕方か？ まずは食事に気をつけろ。性交渉の多い人間ほど高タンパクが必要になる」「昔、牛の

乳房は映画の検閲でカットされた。それでブラジャーを。乳牛にブラジャーをつけた。まったく変な話さ。牛にブラジャーは不要だ」「きれいな眉だ。眉だよ。繊細なカーブが東洋的だ」

*私の誘いにノーの返事は不要なんだけど・・・

55 オタール・イオセリアーニ監督『月曜日に乾杯！』

ヴェニス。列車を降りた駅の前が乗船場。（運河を活かした撮影。他の映画では『しあわせ』、『年下の男』、007シリーズ等が思い浮かぶ。）人の庭にワニを放す。後で写真のモデルに使われている。郵便物を開けて見る集配人。墓場の蛇を捕まえる男。ヴェニスの赤瓦の屋根に登って、ワインを飲む。まさにラッパ飲みで。

『素敵な歌と舟はゆく』Adieu, plancher des vaches

井戸に冷やしておいた白ワインをもって、銃遊び。情事と快楽のためのレンタル船。獣医がバイオリンも教えている。ホテル・レヅナ。

*研究室にあった運河の水彩画は今、自宅の玄関の中に飾られ、毎日私の帰宅を出迎える。イオセリアーニの映画はゆったりとした人生の楽しみ方が享受できるので、好きだな。

56 フィリップ・ド・プロカ監督『まぼろしの市街戦』

原題は「ハートのキング」Le roi de coeur。

*これ以外の記述はなし。

57 ジャン・ルノワール監督『素晴らしき放浪者』

Boudu sauvé des eaux

「あれこそ一流の放浪者だ」「『結婚の生理学』にツバを吐くなんて」

*『ジャン・ルノワールエッセイ集成』（青土社）はいい。

58 ヴェルナー・ヘルツォーク監督『神に選ばれし無敵の男』Invincible

*記述なし。ヘルツォークの映画『カスパー・ハウザーの謎』『フィッツカラルド』などはあの怪優クラウス・キンスキーゆえに強烈な印象を残す。

59 ポール・シュレイダー監督『ボブ・クレイン』

ストリップ・ショーやクラブでドラムを叩くようになった元DJ。グレープフルーツ・ジュース好き。あらゆるオッパイ好き。

*二つの好みは私と共通している、ただし、「あらゆる」はつけなくていい。「あらゆる」の代わりに別の形容を付けたいのだが、ここでは控える。

60 オルドリッチ・リプスキー監督『カルパテ城の謎』

比喩好き、もっともらしい解説、大仰な表現好きの伯爵オペラ歌手。滑稽化される怪奇と恐怖。骸骨が近づい

てきたと思ったら、教師が馬車で教材として運んでいたことが分かる。美しい村長の娘、という言葉に続いて、映しだされるその娘は美しいというより不細工。（それがおかしい。）「忘却によって失意を葬り去ろうとしてきたが」「並外れた私の才能に降参したのだ」「最高のもてなしだ。鹿の肉に、ワインは80年産のシャトー・ドラキュラ」声で敵の装置を回線故障にってしまう。混じる回想場面。

*ドラキュラ映画を出来るだけ集めていた時期がある。

61 ニコラ・フィリベール監督『ぼくの好きな先生』

Etre et avoir

教室を這うカメ。書き取り。教師生活。教える喜び。遠足。

*幸福感。

62 ラッセ・ハルストレム監督『幸せな僕たち』

ドラマが生まれるには男二人に女一人。冷蔵庫を持ってピクニック。友だちの結婚。「気ままな暮らしは諦めて、社会に適合する気だ」「結婚なんて正気じゃできない。いつも一緒にいるから悲劇になる」「サーモンとの新しい関係が深まりそうだ」男同士ではビール。彼女とはワイン。

『僕は子持ち』

カミソリの宣伝場面の後のスクリーンにそのままクレジットタイトルが流れ、その前で社員が議論。妄想（嫌なやつを射殺、妊娠を聞かされて自分が牢獄に入れられている）。内面のもう一つの本音が別場面で挿入される。ケチャップが空になり、空気音が出たのをきっかけにおならの音真似ごっこ。妊婦のいらいら。「魚味がいいって言ったのに」

『サイダーハウス・ルール』

とある孤児院。りんご農園。摘み取り人。

*53に続いてハルストレム再登場。あなたは、ますます観たい気持ちになっただろうか。

63 ミカ・カウリスマキ監督『ゴー！ゴー！LA』

「彼女の姿を見た途端、胸騒ぎがした」「いくら葬儀屋でもくらすぎるぜ」「気がついたらぼくは機上の人に。窓の外には「冒険」が広がっていた」

*カウリスマキのBOXを購入したいのだけれど、それはしない。今、持っているのだけで我慢する。何しろ今は、本もCDもDVDも少しずつ買取処分してもらっているときなので。

64 キム・ジョングォン監督『リメンバー・ミー』

「歳月の流れは壊せないものだ」

*買取価格180円。

65 クァク・ジェヨン監督『猟奇的な彼女』

「彼女が痔のある衛生兵とでっちまった。おまけに家で飼ってたメス犬も野良犬と出ていった。俺は97%の確率でくそを踏む運のない男さ」ハイヒールをはかされる。「ノーパンの私をつかまえて」

*直前に置いた命令文に対する返事のつもり、「了解」。

66 ピエトロ・ジェルミ監督『わらの男』

妻の手荒れを嫌って、クリームを塗ってあげる男。「さよなら、と言ったあとに心の中に奇妙な余韻が残った」「将来は大事だけど、今はもっと大事よ」「ママがほめてたよ、パパはマゾだって」「違うだろう、マメだろう」「そして、悲しい出来事の記憶は封印された」

*村上春樹の『村上ラヂオ2』に次のようなことが書かれている。「かっぱらいに注意」の「らい」がマジックで塗りつぶされてある看板を目撃した話で、その後は「暇な人がいる」という言葉で終わっている。

『誘惑されて捨てられて』

シチリア島。

*鳥という言葉になぜか妄想をかき立てられる。

67 バク・テヨン監督『恋風恋歌』

旅と景色と恋。カモメ釣り。「ここに来て、久々に笑ったから。3年分は笑ったな」

*買取価格100円。

68 ロベール・ブレッソン監督『ブローニュの森の貴婦人たち』

*記述なし。パリの西にあるブローニュには行ったことがない。たぶん、パリ滞在当時、私の行動圏からは外れていたのだろう。

69 サム・ペキンパー監督『ワイルド・バンチ』

「ワイン、その赤い色の誘いに心動かされてはならぬ」

*禁止に反抗するつもりでもなんでもなく、ふつうにワインの色には心惹かれる。

70 イングマル・ペルイマン監督『リハーサルの後で』

ある種の演劇論、俳優論。演出家と若い女優（彼が好きだった元女優の娘）。「私生活では演じるな。舞台での演技の邪魔になるから」彼女の両親の私生活を支配する芝居の影響。演技しつつ反応をうかがう母親。演技をしなければ自分を表わせなくなった母親。

『魔術師』

*記述なし。

『もだえ』

カリギュラと渾名されるサディストのラテン語教師が女につきまとう。今で言うストーカーみたいな。部屋をあとにして出た戸外の明るいシーン。

『不良少女モニカ』

港のシーン。(若者達のデートの約束を見た老人が言う、「春っていうのはいいもんじゃな」市電、アパート、街のシーン(アジェのバリ写真のような)。ピクルス。親子関係。性被害。(女との付き合いが運命の変化をもたらす。)水の光景。

『夢の中の人生』

売春婦殺しの男に関する証言。事件前の出来事。事件の前後。

『渴望』

スイスのバーゼルにきた新婚カップル。陽光眩しい湖。夏の記憶。列車の中で。「私たちは鎖でつながれた囚人」男から解放される方法(女同士で愛すること)を見つけたダンス学校の同級生。

『愛欲の港』

港湾労働者。非行で保護施設に入れられた過去を持つ娘。

『危機』

静かな街。「バスの到着が大事件だ。危険な都会の香りがふと流れ込む」日差しの戸外。18年間預けばなしだった娘を取り戻しにきた女。日だまりの風景。

『叫びとささやき』

光と影。赤い部屋の白いドレスの女たち。姉妹の愛憎。

『歓喜に向かって』

妻の死と、その夫である音楽家の回想。熊のぬいぐるみ。「言っておくけど私は扱いにくいわよ。そのことは覚悟しておいて」坂道。港。海に見える家。「アヒルちゃん」「秘密の言葉がささやかれたみたいだった。愛し合う男女だけに分かるなぞめいた官能的な言葉」空には夏の太陽。幸せ。男の指にマニユキアを塗る女。生活と芸術の矛盾。

『悪魔の眼』

誘惑の達人、愛の狩人、ロマンチストの地獄のドン・ジュアン。誘惑が完了しないうちに女が消滅する罰・拷問をうける。ある娘の処女を奪いに地上に送り込まれる。

誘惑指南。北欧の若い娘を誘惑するための手管。「じわじわ攻めるより一気に迫る方が有効だ」「優しさと強

引さの組み合わせで迫れば女は抵抗できなくなる」「南国のムードを加えるとより効果的」「洗練された上品な物腰で女の信頼を得ること」「哀愁に満ちた表情に苦悩の影を漂わせて同情させ、想像をかきたてること」「露骨で下品な言動はいかなる場合も禁止する」「ニヒルな男を演じるといっそう効果が期待できる」「北欧の女は紳士らしい口調とりわけ外国なまりに弱い」「ハンサムな外見もちろん邪魔にはならん」「讚め言葉に不慣れだ」「顔や服を褒める際は慎重にやること。熱心に褒めすぎるとウソくさくなり、女は逃げてしまう」「北欧の女は気丈で鼻っ柱が強い。ロマンチックだが冷淡な面もある。不安も強い」「平気で裸になるが勘違いしないように」「冬は厚着で扱いにくいので、夏の間を狙うこと」「男への警戒心がないので、攻撃しやすい」「ただし、道徳観が強いので陥落させるのは難しいぞ」

*ドン・ジュアン物は元々好きだった。誘惑術を学習するという真摯な目的もあったかもしれないが、今あるのは、そうはうまくいかないという苦い諦観とかすかに甘い記憶。

『夏の遊び』

川面のきらめき。島で過ごす夏。「夏休み鳥と呼んでる」「真夏の太陽がキラキラと照りつけた日の夜。天空の彼方に届くほどの深い静けさが漂っていた」「宝石のような日々が過ぎていった。陽光を浴びて抱き合い、夜は眠ることさえ忘れて夢中で語り合った」夏の終りの悲しみ。

*ここまでのメモで目立つのは光、夏といった言葉だが、ベルイマンの映画のきらめき光る夏のモノクロ画面は本当に美しく、その中に自分も身を置きたいほどののだ。

『夏の夜は三たび微笑む』

恋の鞘当て。主人と召使い。恋の錯綜。マリヴォー劇のよう。若妻と観劇(夫の元恋人の女優が出る芝居)。弁護士のその夫が処女妻のことで女優に相談をもちかける。女優の家で男二人が鉢合わせ。女優の母親。「きれいに別れた男は後で役立つ」「人の話なんか聞くから体を壊すのよ。聞かないことにすればいつも健康そのもの」「人妻は毎日退屈してるからね、簡単に口説けるよ」水辺の館。光。女優の計略。「光りが輝くうちに人生を楽しめ、色褪せぬうちにバラの花を摘め。不安や悩みばかり追い求める者は人生の谷間に咲くすみれに気づかない」「夏の夜が微笑んでいる。夏の夜の微笑みは三度。最初は真夜中と夜明けの間だ。若い恋人たちが心と体を開く」

『シークレット・オブ・ウーマン』

妻たちの本音。回想のバリ。腿の間に5フラン硬貨をはさむことでシャンパンを獲得。サン・マルタン運河近くのホテル？

『野いちご』

一種のロード・ムービー。孤独という罰。

『冬の光』

恋人にできた醜い湿疹のせいで祈ることができなくなった牧師。無理に神を信じようとする信仰の矛盾と冷酷を彼女に指摘される。「自立した女の顔は仮面なの。願いはただ一つ。誰かのために生きたいの」

『処女の泉』

*記述なし。

71 ホ・ジノ監督『春の日は過ぎゆく』

竹林の音録音。別れ際に、「ラーメン食べてく?」「酔った姿ステキよ」「何ラーメン?」「今日は餅ラーメン。キムチも入れて」「僕がラーメンに見える? 言葉に気をつけてよ」「バスと女は去ったら追うもんじゃないよ」

『八月のクリスマス』

スイカの種を飛ばす。「歳月は多くのものを変える」写真屋。

*以下の77、78、79などもそうだが、韓国映画のDVDを購入していた時期に入手した作品。

72 チャン・ソヌ監督『嘘』

性的な台詞の過剰と過激。「私のあそこは、スプーンですくえるくらいぐしょ濡れだった」加虐と被虐の役割交換。

*買取価格370円。

73 オ・ギファン監督『ラスト・プレゼント』

クラス写真。回想場面の魔力。素直に愛情表現が出来ない二人。抑制の美学。家族写真。

*こうして記述はあるが、記憶はなし。

74 イ・ジェヨン監督『情事』

妹の婚約者との情事。「ぼくたちは多くの偶然の中に身を置いています」「ぼくに二度と会えなくても生きていける」

*買取値段1330円。

75 パク・フンシク監督『私にも妻がいたらいいのに』

蛍光灯交換を頼まれた男。頼んだ女は、男のずり上がったシャツから臍が見えると言ってしまふ。「可愛いお臍してますね」お札にアメー個。銀行で足りない硬貨分を立て替えてもらった時も、防衛訓練で足止め。銀行の監視カメラに向かって、相手への恋を伝える。「私にも妻がいたらいいのに」、これは彼女が言う台詞。

*しばらく、「・・・ならいいのに」という言い換え遊びを

したことがある。

76 サマンサ・ラング監督『アイドル』

隣の若い女の行動に欲望を刺激され、バランスを失っていく元料理人のザオ。老人ホームのザオ氏にせまるくずれた肉体の女。「中国料理は奇跡をおこす。死んだ人の食欲さえそそる。」La cuisine chinoise permet d'accomplir des miracles. On peut tant donner l'appétit à des morts. 性行為中の大声を管理人から手紙で注意されるサラ。

*買取価格850円。

77 ルキーノ・ヴィスコンティ監督『白夜』

一年後の約束を信じて恋人を待つ女。その女と知りあい好意を抱く男。女が過去を語り始めた時には無意識に気を許している。

*21に引き続き、またもヴィスコンティ。彼の作品はBOXで持っているのだ。

78 ホン・サンス監督『気まぐれな唇』

*記述なし。題名に惹かれて購入したのは明らかだ。買取価格570円。つまり今は、惹かれていたのにあまり満足を得られなかったのか手放してしまった唇。カラオケで高橋真梨子「はがゆい唇」を歌うのは好きだ。

79 エットーレ・スコラ監督『スプレンドール』

映画をめぐる物語。「21分間の熱烈なキスだ。計ったから間違いない。ぼくらはキスの歴史を塗り替えたんだ」

*キスという言葉は私の目を逃れることはできない。こうして必ず記述されることになる。

80 フィリップ・カウフマン監督『存在の耐えられない軽さ』

子豚のメフィストもブラック・タイで結婚式に参列。グラスを何段も重ねてシャンパンを一番上から注ぐ。

*シャンパンのきらめく泡。「シャンパン色のパンティーだけの姿で、スージーが舞台中央に立ち、催眠術師の命令を待つ時、彼は途方に暮れる」(パトリス・ルコント『リヴァ・ベラ』、春風社。)

81 ムルナウ監督『サンライズ』

沈黙の雄弁、語り。湖面の美しさ。静寂の恐怖。写真に定着された接吻。豚が招く混乱の楽しみ。酔った豚。

*こちらは酔った豚、80では結婚式に出る豚。私は豚ではないけれど酔ったこともあれば結婚式に出たこともある。

82 ジャック・リヴェット監督『パリでかくれんぼ』

パリ、白黒、引用、人物、物語性、台詞、舞台と

映画。パリの通り。rue du Moulin de la Pointe、rue Béranger。

*リヴェットが映画で見せるパリの街は本当にいい。ムーラン・ド・ラ・ポワント通りは13区。ペランジェ通りは3区、レプュブリック広場の近く。広場にあるベルギー・ビールが自慢のビストロは好きだった。

『恋ごころ』 Va savoir

屋根の天窓を押し上げて抜け出すシーン。最後の芝居と現実の渾然一体。セヌ河畔。レプュブリックの辺り。

*リヴェットの映画DVDはその後『Mの物語』『ランジェ公爵夫人』などを観ている。

83 マリオン・ヴェルヌー監督『ラブ etc』

出演シャルロット・ゲンズブール他。恋人募集広告。フランス版カラオケ・シーン。女一人に男二人、現代版『突然 炎のごとく』みたい。

*カラオケ・バーを三軒ハシゴしたことがある自分に呆れつつも愛おしい。

84 ヴァレリアン・ボロヴツィク監督『愛の島ゴトー』

タイトルが魅力的。閉ざされた島で、王妃に懸想した囚人。

*美しくも不穏な感じがボロヴツィク映画の魅力。

『邪淫の館 獣人』 La Bête

馬の交尾シーン（射精のあとメスの性器を舐めるオス）。メリメの『ロキス』。

*見てはいけないうのに目を奪われてしまい、あとはしばらく心がざわつき、落ち着かない。この映画を私に教えてくれたのは、まるで愛の島の王妃みたいな女性だった。買取価格2900円。

85 フランソワ・オゾン監督『ベッドタイム・ストーリーズ』 Scènes du lit

「靴下は4日持つ。裏表にして2日、左右を履き替えて2日」と言う男にげんざりした女がベッドから逃げ出す。タイトルが予感させるエロチックでロマンチックな展開と主人公（ミスター・クリーン Monsieur Propre）のロマンチックさのかけらもない性格との落差が生む黒い笑い。

『サマードレス』 Une robe d'été

女にナンパされて砂浜の森で愛しあっていたゲイの男。服を盗まれ、全裸で困り果てる。女に貸してもらったワンピースを着て、自転車に戻るシーン。下半身に入り込んでくる風が気持ちいいのか嬉しそうな表情。

*以上の二作はフランソワ・オゾン監督作品『海をみる』というDVDに収められている。

『焼け石に水』

深刻な事態と軽妙な音楽の落差。滑稽化。

*ベルナール・ジロドーが出ている。最近訳したパトリス・ルコントの対談集で彼のことも話題にされている。

『まぼろし』 Sous le sable

海で失踪した夫。そのまぼろしと生きる妻。あたかも存在しているかのように、日常生活で話題にする。夫の母親との残酷なやり取り。《Je vous dois tout mon bonheur. Je ne veux plus vous gâcher la vie.》

『8人の女たち』

*記述なし。もちろん観てはいる。その後のオゾン作品『スイミング・プール』『しあわせの雨傘』『危険なプロット』、これまた当然鑑賞済み。

86 フィリップ・ガレル監督『秘密の子供』

L'Enfant secret

スワンという子供。白黒画面の背後に流れる静謐な悲しみを湛えるピアノの旋律。

『愛の誕生』 La naissance de l'amour

出演ジャン＝ピエール・レオー。『失われた時を求めて』の冒頭が引用される。家事の問題。義務として要求する女と、気が向いたときという条件つきで好きにやりたい男。理解不能性。結婚という義務の重荷。拘束の重圧の象徴。ミュッセやボードレールからの引用。旅。メトロのラスパージュ駅。ヌーヴェル・ヴァーグの監督たちの映画撮影をよく務めたカメラマン、ラウル・クタールが撮影したモノクロ画面。

*どちらの映画からもガレル監督のブルースト好き、文学好きが窺われる。ラスパージュ、懐かしい駅だ。その近くの和食の定食屋によく行った。頼んだのは大体決まって焼魚定食。

87 エリック・ロメール監督『恋の秋』

*記述なし。ロメール映画はともかく台詞が多いという印象だ。まるで画面が飛び交う台詞で充満しているみたいな感じ。隙間なく台詞で埋め尽くされているのが嫌かというところではなくて、私は割と好きだ。彼の作品はおそらく全部DVDで持っている。

88 ジャン＝リュック・ゴダール監督『はなればなれに』

ラウル・クタール撮影のモノクロ画面。ミシェル・ルグランの音楽。ナレーション。

英会話教室で口説くこと（ノートの切れ端に手紙を書いて）。髪型が野暮、流行遅れであると告げるアルチュール・ランボー。トイレのシーン。化粧する女が脇に立て掛けた新聞に Gardez vos yeux d'enfant. と書か

れてある。「ルノーにお勤め?」「どうして?」「ルノーの車みたいに間抜け顔だから」パリ郊外。クリシー広場。メトロ。リベルテ駅。『シャイヨの狂女』。ルーブル。「セヌ川はコロの絵のようだった」オディールにその場でストッキングを脱がせて、それを覆面(cagoule)代わりにする。引用することへの情熱。

*ゴダールの映画の中では好きな映画だ。

『小さな兵隊』

ジュネーヴ。引用の氾濫。アラゴン。「ジロドゥーの小説の娘を思わせた」Glantという駅名がラ・フォンテーヌの「どんぐり」の話を連想させる。ジャン・コクトーの『山師トマ』。コンスタンとスタール夫人の館。ルソー通り。「ドリュ・ラ・ロシェルの友人だった」アンドレ・マルロー『人間の条件』。ベルナノス。「ぼくらは学校に行くように戦争に行った」友人のカメラマン、ラウル・クタールが言うように「最悪の事態」だった。サシャ・ギトリ。

*サシャ・ギトリの戯曲は音で聴くと滔々と淀みなくなされる台詞回しに驚嘆させられる。

『メイド・イン・USA』

ポケットから出てくる歯磨き剤と歯ブラシ。日本語の歌を歌う娘ドリス・溝口。

*トニ・ガルボのポケットから出てくるものはすごい（参照パトリス・ルコント『リヴァ・ベラ』春風社）。

『恋人のいる時間』 Une femme mariée

顔の见えない男の愛撫する手。腋毛の処理についての意見の違い（刺激度の問題）。モリエール。ボシュエ。逢い引きの巣。セヌ河畔。エッフェル塔。ナシオンのプランタン（「下着売り場が充実しているから」）。接近し、触れ、重なり、絡み合い、交わる手。風呂上がりにむだ毛処理（アンダーヘアも）。美乳維持の努力。通いのメイドさんの家事最中の性的話題。ラシーヌ『バレニス』。

*昔々パリ滞在中、クラリネットを購入した楽器店はナシオンにあったのではなかったかな。

『ウィークエンド』

撮影ラウル・クタール。出演ミレーユ・ダルク、ジャン＝ピエール・レオー。背景ののどかな田園風景と、前面の渋滞の狂騒、狂躁、はちゃめちゃ。引用（ブルトン、デュマ、エミリー・ブロンテ、サン・ジュスト。）ジェイムズ・ボンドと過ごす夢。エルメスのバッグ。映画を遊ぶ、玩具にする。風景映像が想像させるイメージ、ステレオタイプな思いと乖離する内容。おかしさ。森の中のドラマ。

*「ウィークエンド」という言葉に惹かれるのは、その中に終わりと始まり、エピローグとプロローグが内包されているよ

うな気がするからだろう。エリオットの次の詩（ノートに書いてあったのを見つけたのだが、出典の記載はなかった）を引用しておく。「終わりは始まりに先行する／そして、終わりと始まりは常にそこにある／それは始まりの前に、終わりの後にある／・・・とすれば、すべては常に現在なのだ」

『カラビニエ』

カルト映画。

*カルト映画とは、「広く大衆受けすることはないが、若者を中心とする特定の層が熱狂的に支持するマニアックな映画をいう。公開当時、内容の不道徳性や反社会性、低俗性で忌避された作品、あるいは基本的な映画文法からの逸脱で不評を買ったり軽視されたりした作品などが、初公開からかなり時間が経ってから新たに注目を浴び、こうよばれるようになるのが通例で、旧来からのジャンルでいうとホラー映画やミステリー映画が圧倒的に多い」（『世界映画大事典』日本図書センター、2008年。）

私がすぐ思い出すのはジョン・ウォーターズ『ピンク・フラミンゴ』である。ラース・フォン・トリアー『イディオッツ』もカルト映画と言えるが手放してしまった（買取価格1330円）。

『男性・女性』

「元気かい?」「元気じゃない」「どうした?」「10時前は元気じゃないんだ」「10時10分過ぎだぜ」「それじゃ、元気だ」「悪くないぜ」「何が?胸か?」（カフェで、砂糖を借りる口実で女性のテーブルに近づいて、胸の大きさ・形状を確認してくるシーン。）カシス酒。コインランドリー。インスタント写真。インスタント・レコード機械。ピンボール（フリッパー）。トイレのホモ同士のキス。自作の引用（車を盗むベルモンド）。

『パッション』

映画制作、現場、映画論の映画。物語と光の必要性。「影というものは存在しない。影は光の反映にすぎない」光と影（ゴダールが求める光はどういう光?印象派の光とは違う?）イザベル・ユペールのボーイッシュな印象。「わたしの日本車にぶつけたわね」

『フォーエヴァー・モーツアルト』

文学的な引用。マリヴォー『愛と偶然の戯れ』。カミュが事故死した車。ミュッセ『戯れに恋はすまじ』（作中と同じカミーユという名前の娘）。「ロゼット役が決まった」ユゴーからの引用。カミュ『反抗的人間』。アルノ川。ベルナノスの言葉「何のための自由だ?」ロッセリニ。映画の映画。バイオリン演奏。

*ゴダール映画を観るのは引用を看取したり、読み解き戯れることかもしれない。

『ゴダールの探偵』

Hôtel Concorde、Saint Lazare。舌を触れ合うカップル。恋人の乳房相手に、そっと愛撫するようなパンチの練習をするボクサー。

『男と女のいる歩道』

トリュフォーの『突然 炎のごとく』の映画看板が映しだされる。

*ゴダールは53でも取り上げてあるのだが、こうして見るとかなりの作品を観ていたんだ。ただ、自分でも嫌なのはゴダールは観ておかなければというような教養主義みたいなものに当時はとらわれていたことが分っているからだ。うさん臭い自分と直面するイヤな感じ。

89 ブリュノ・シッシュ監督『バルニーのちょっとした心配事』 *Barnie et ses petites contrariétés*

オリエント急行でのヴェニス行きの三つの選択肢の間で自問自答するバルニー。ハンサムな愛人となら、カザノヴァについて語るとか知的な会話を楽しめるし、また、可愛い若い娘の弾ける肉体も捨てがたい。妻の提案も拒めない。

*バルニー役のファブリス・ルキーニが絶妙。

90 ケン・ラッセル監督『クライム・オブ・パッション』

性幻想を掻き立てるゲーム、語りで男を楽しませる娼婦。時々混じる、エロチックな絵や浮世絵。浮世絵集を所有。昼は仕事熱心なOL。彼女の素性を探る仕事を引き受けた男（家計のたしにしたい）。セックス・グッズを鞆に持ち歩くキレた牧師役アンソニー・パーキンス。

『チャタレー夫人の恋人』

「ラシーヌを読もう、本格的にフランス語で」「ブルーストを？ 読んだけれど退屈だったわ」

91 クロード・ルルーシュ監督『男と女』

港町ドーヴィル。Je brûle? (もうちょっとで正解?) 映画の話。un coureur (レーサー)。何千キロも車を飛ばして、(電報で愛していると伝えてきた) 愛する女に会いに駆けつける情熱。パリの駅に先回りして待つ。

92 ジャン・ユスターシュ監督『ぼくの小さな恋人たち』

暗転で場面転換(章が替わるように)。回想。自伝的。自転車に三人乗り。田舎町の光景。人気のない並木道。「映画のキスの仕方はうそだぜ」「本当はお互い舌を入れてするんだぜ」「気持ち悪い」列車に同級生がプロの女を連れてきて、キスや愛撫を見せてくれる。実習見学のシーン。

(引越した) 街の並木道。散歩が伝統。「散歩しな

がら、女の子を見つけるのさ」映画館でキスを目撃して、刺激されて、前座席の女に同様の行為に及ぶダニエル。「その人のフランス語の教師がひどくて、授業が嫌になったって。例えば、古典ならラシーヌとかコルネイユの戯曲で、毎年同じことしか言わないんだって。だから、言葉に心が全然こもってないんだ。そんな教師に戯曲が教えられるわけがない。内容をなぞるだけで、情熱は教えられない。生徒のその人は戯曲が好きで、すごく情熱を持っていたんだ」「ライター。火を頼まれたら、女の体に近づけるだろう」風景の中をバイクや自転車を走らせるシーン。「愛に抜け駆けはない」隣町の街道で姉妹をナンパ。「普通は男が話すものよ」「悪い習慣だ」草むらでのキス。吹き渡る風。

*これが多くの人の共通認識であるかどうかは疑問だが(経験しないと分からないものが世の中にはいくつも存在する)、色々なキスがある。その濃度にも。恋人たちの濃密・熱烈なキスから、挨拶の場合のように儀礼的な淡々としたものまで。愛する者同士では、すべてはキスから始まる。キスで最初に欲望に緩やかな点火がなされ、それが徐々に勢いを増して、互いに相手を貪欲に求めずにはいられない興奮のプロセスが好きなと、ある女性が私に言った。そのプロセスを実行したあとで。

『悪い仲間』 *Les mauvaises fréquentations*

「ナンパもできやしない。サンミシエルへ行こうぜ」歩行に従って動くカメラ。パリ、モンマルトル界限。小林正樹監督の『切腹』が上映されている映画館。テルトル広場へ。ダンスホールを探して。「君の社会的な基盤は？ つまり仕事は何？」ムーラン・ルージュ。Juste Métivier 通り。

*ジュスト・メティヴィエ通りはモンマルトルにある。モンマルトルはよく散歩した。それと知らずに通っているかもしれない。

『サンタクロースの眼は青い』

ナルボンヌの街。本の万引き。

*以上、ユスターシュの初期三作品はどれも好きだ。20に続き、ユスターシュを取り上げるようになったわけだ。

93 ボー・ヴィーデルベリ監督『あこがれ美しく燃え』

スウェーデン映画。夫の軒停止用グッズ(押すと音の出るゴム製のおもちゃ)。跳び箱の中で愛しあうこと。

*どんな場所であれセックスの場所になってしまうのは才能の一種？

94 マノエル・デ・オリヴェイラ監督『世界の始まりへの旅』

スペイン・ポルトガル国境のミーニャ川。車で移動すること。妙に懐かしい風景。

*31に続いて、またもオリヴェイラ監督映画作品。実際の

風景の中よりも映画の風景の中にゆったりと身を置きたいと思うのは何故なんだろう。

『アブラハム溪谷』

ポルトガルのラメゴ。ドウロ川。段丘状の葡萄畑。薔薇の香りに恍惚とするエマ。薔薇の花弁が織りなす襞＝子宮の襞＝官能性。エマの天性の挑発力、男たちの欲望の誘発力。陽光、蠟燭の明かり。夜の闇と欲望の闇。川面と柔らかな風。すべてを救済する眩い光。『ボヴァリー夫人』を引用することで、種明かしをするとともに距離を置く。

*小説を基に映画化する際の注意、技法については、トリュフォーもどこかで言っていた気がするのだが。

95 パオロ・タヴィアーニ、ヴィットリオ・タヴィアーニ監督『グッドモーニング・バビロン』

「息子はオヤジを急かさぬものだ」「アメリカは征服されることを拒んだ」靴紐がほどけたことにして、遅らせる。自分たちが仕事を掴むため。映画の映画。鳥小屋の中で、恋文を書く二人の兄弟。皆に読まれてしまう恋文。シェイクスピアからの引用。すっぱかされた昼食。水辺でシンバルを打ち鳴らす。森で愛しあうこと。映して残すこと。

*水辺でシンバル、何かこうしたシュールな感じには惹かれる。

96 ジャック・ドワイヨン監督『イザベルの誘惑』

La tentation d'Isabelle

牛に愛撫される男。（男女二組の嫉妬や心理の錯綜はどうでもいい。つまらない。）田舎の風景は美しい（Le Locle の駅）。光と緑の広がり。つまらない詩をかく自意識過剰の、自信のない男。

*私のうんざり感が感じられるメモ。たぶん題名に惹かれて購入したものの、期待していたほどではなかったのだろう。

97 カール・テオドール・ドライヤー監督『ガートルード』

恋の幻想、落胆。男女の生き方の違い。室内劇（ミュッセ）。固定カメラ。

『怒りの日』

モノクロ画面の陽光の美しさ。背景に魔女裁判。田園、ボート、自然光。性愛、欲望開放。性的魅力ゆえに魔女扱いされる。

『奇跡』

*記述なし。ドライヤー監督映画についてはいつか詳しく論じたい。願望だけで終わる恐れがあるけれど。

98 北野武監督『ドールズ』

みかんをエサに魚を釣ること。四季の色彩美しい映像。静かに途切れることなく続く熱い情念。残酷に呪縛する運命、愛する思い。自ら失明。谷崎の『春琴抄』を思わせる。

*小さいころの釣りは沼釣りで、餌のミミズはそこら辺の土を掘り返せばいくらでも出て来た。私の場合、川釣りや海釣りに発展することはなかった。

99 バゾリーニ監督『デカメロン』

秘密と策謀に通じる路地裏、迷路状の細道。悪意を隠す美貌。糞尿譚。「帰れ、クソ野郎」 あざなう糸の運命（不運が幸運に、幸運が不運に）。ウンこが幸ウンをもたらす。

光と影。昼と闇。性の哄笑。午睡と欲望の横溢。シエスタ時の快楽。蟬の声。海を臨む修道院。快楽の順番待ちをする修道女たち。「レタスが好きで、つい大食いを」「大した罪ではない」 イタリアの家の造りと風情。景色。

*おおらかで遠慮のない生と性の肯定と賛美が好ましい。

『カンタベリー物語』

老人の若い娘願望（柔肌が与える快楽ゆえの、昔からの永遠の願い）。庭園の誘惑。「記憶の中のお前より、今のお前の方がずっと美しい」 住居の構造が掻き立てる好奇心。影の映像化。

*柔肌、魅力的な言葉だ。トリュフォー『柔らかな肌』が思い出される。

『アラビアンナイト』

夢の中の夢の、また夢。物語の中の物語。連鎖・入れ子構造。建物の構造と物語性。女性の愛の中心に矢を射ること。「誠実は美、不実はさらに甘美」 男性の中心部が切断されること。峨々たる岩山の麓に佇む白亜の家々。

*毎夜、官能的な夢の訪れを期待しているのだが。連続三振みたいに、期待は裏切られ続き。

『豚小屋』

逃げる兵士を追いかけるシーンの遠景・望遠撮影と手のクローズアップの素晴らしさ。

100 フェリーニ監督『崖』

詐欺師。住宅申込金と偽って金を集める。

『インテルビスタ』

映画の映画。

『フェデリコ・フェリーニ』

「ただの物語、娯楽」「昼寝をして、人に言えない夢を見る」

『道』

海辺の淋しい村。田舎の結婚式。ロープの上でスパゲッティを食べる芸。

『甘い生活』

パパラッチの存在。

*フェリーニは17でも取り上げたが、どの映画も好きだ。

101 ルキーノ・ヴィスコンティ監督『郵便配達は二度ベルを鳴らす』

亭主との生活から逃げ出したい美貌の女房。迷い込んできた旅の男を誘惑する構図。殺しに発展(『めんどりの肉』)。

102 ミケランジェロ・アントニオーニ監督『女ともだち』

女同士の美容法の話。「女には男の愛が必要な」コロッケとワイン。浜辺のシーン。「あなたも人前でキスを?」「でも、キスは好きね?」河畔の道路。トリノの下町。「ポー川にも行きたい」

*アントニオーニ映画の中では好きな作品。

103 マティアス・ルドゥー監督『裏窓の女』
En face

モンマルトル、ガブリエル通り。視きのテーマ。「停電でもぼくのマックは、バッテリーで動く」疑惑の増幅。

*ガブリエル通りはサクレ・クール寺院へ登る階段の途中から左に延びていて、そのまま行くとルピック通りに至る。ここも歩いた可能性は大。

104 シンディー・シャーマン監督『オフィスキラー』
*記述なし。題名に惹かれて購入したのは見え見えだ。

105 アルモドバル監督『アタメ』

「5万ペセタあるわ、ベッドで与えてくれた甘美な快楽の代償よ」

*縛られることに性的快楽、興奮を覚える女性が登場する映画だ。それにハチャメチャな出来事、おかしい人達が加わる。アルモドバル映画については45も参照のこと。

106 『007シリーズ』

番外編『ネバーセイ・ネバーアゲイン』

ショーン・コネリーのボンド復活。干されたボンド。上司のいじめで閑職に追いやられているボンド。健康管理とダイエットを命じられて病院入り。敵の顔に投げつけ、効果抜群だったのが、ジェームズ・ボンド氏の検査用尿。特殊武器の予算削減。融通のきかない官僚を批判。バハマのナッソー。「(海上) スキーがうまい」「ほかの

こともじょうずよ」「だろーね」南仏。海に見える別荘。「回顧録では、君をNo.1にするつもりだった」「快楽の極地を味あわせてくれた最高の女は私だと、書いて」

1話『ドクター・ノオ』

ショーン・コネリー。ジャマイカ。カリブ海。ファイア島。秘書マニーベニーとのやり取り。毒グモ(タランチュラ)。海上で愛しあうこと。

2話『ロシアより愛をこめて』

ヴェニス、チェス選手権。(ヴェニスについて) マニーベニーとのやり取り。「海辺の月がロマンチックだ」「連れていって」イスタンブールの異国情趣(バザール、モスク、海、1600年コンスタンチヌス帝による地下水路、聖ソフィア寺院、船)。ジプシー女の踊り、(一人の男をめぐる)決闘。朝食はイチジク、ヨーグルト、コーヒー。「尾行はお互い様で」「国際親善か」オリエント急行。イスタンブール、ベオグラード、ザグレブ、トリエステ。ボートでヴェニスに。運河で(ホテルでの熱演を)再現。

3話『ゴールドフィンガー』

マイアミ・ビーチ。「世の中にはルールというものがある、例えばドン・ペリニョンは3.5度以下で飲むべしとか」車アストロマーチン。「一服できる」「お前の情事のために開発したんじゃないぞ」ゴルフ。ジュネーヴ。山岳風景。ボルチモア。色男健在。「母性本能が目覚めたな」最後に美女と愛しあって終わるパターン。

4話『サンダーボール作戦』

フランス、パリ。マニーベニーと。「帰ったらお仕置きだぞ」「待ち遠しいわ」「その手にはのらないわよ。老人はだませても」「写真だけで分かるの?」「左の太股にホクロがある」バハマ諸島のナッソー。バルミラ。美女とドン・ペリニョン。島の邸宅、島の快楽。カーニバル。「死ぬほど飲んでね」(こう言って女を椅子に凭れさせるのだけれど、女は実際死んでいるのだ。)青空と海。

7話『ダイヤモンドは永遠に』

ショーン・コネリー。「ダイヤモンドは犬に代わる女性の友」ホーヴァークラフトでオランダへ。オランダ運河めぐりの遊覧船。リオが香港に逃げようという提案に、「香港のスーツはいい」サーカス。「私の抗しがたい魅力と彼女の忠誠心の争いさ」ホテルのスイートルームの効用は「より完全な結合を求めて」55年のムートン・ロートシルト。

8話『死ぬのは奴らだ』

ロジャー・ムーア初登場。ニューオーリンズ。カリブ

海のサン・モニック島。超磁石付きの時計で美女のワンピースのジッパーを降ろすボンド。蛇。カリブの美しい島と海。

9話『黄金銃を持つ男』

小人。浜辺でシャンパンを飲む男女（優雅な休日、快楽を予感させる演出、エキゾチシズム）。ベイルートの踊り子。「魅惑的なお腹だね」マカオのカジノ。香港行きのボート。クイーン・エリザベス号の残骸。ペニョンシュラ・ホテル。敵の女とシャンパンで乾杯。殺し屋スカラマンガが殺しの前夜に抱くための女（闘牛士が試合の前夜に女を抱くように）。死と性の興奮。バンコク。力士。ボンドも「極楽だ」と喜ぶタイ女たちのマッサージ。運河。二人の女（女のライバル心というパターン）。タイ式キックボクシング。おかしな警官役（再登場）と再会。64年のドン・ペリニョン。船で愛しあうこと。「楽しみを中断されたくない、続けよう」タイのプーケット島近く（エキゾチックなロケ地探し）。

10話『私を愛したスパイ』

（007役ロジャー・ムーアは、出演作の中で一番のお気に入りだと言う。）

オーストリア・アルプス。エジプト、カイロ。異国趣味。砂漠。ラクダに騎乗するボンド。（美女との一夜の歓待を勧められて、「エジプトで宝を掘らぬ者は愚か者だ」格子が生み出す光と影の効果。ピラミッド。民族舞踊。汽車の旅。地中海、サルデーニャ。毒鱈を持つ魚を見て、「美しいが死を招く」「招かれざる客とはお別れだ」（敵のヘリコプターを撃墜）。「ドン・ペリニョン好きに悪人はいない」

11話『ムーンレイカー』

コリヌス・クレリー（パイロット役）。ミシェル・ロンズダール。カリフォルニアのフランスの城。ヴェニスガラス工房。運河。ダニエリ・ホテル。エキゾチシズム。ゴンドラに載った棺から出てくる殺し屋の手。剣道。リオ。カーニバルの夜。陽光、海、快楽。高台からの景色。ロープウェイ。美しい景色とスリリングな状況の共存。「あなたのお世話を」という看板に突っ込む担架の男。インディオ風の服装。「珍しくうけたな」アマゾン。タピラビ川。イグアス大瀑布。「ボンド君、せっかく楽しい死を用意したのに、楽しみ方が分からんのか・・・私のベットも喜んでいたのに」「オスは苦手でね」（大蛇に襲われて）。軽快でスマート。宇宙船で、シャンパンで乾杯するジョーズと恋人。宇宙で愛しあうこと。

13話『オクトパシー』

インドのデリー。「思い出を集めているの」「それじゃ、もっと思い出を増やそう」（シャンパンが恋の序曲、

前戯、ベッドの快楽の刺激剤）。サーカス。

14話『美しき獲物たち』

アイスランド。スイス。ロンドン競馬。パリ、エッフェル塔（レストラン）。セーヌ河畔。シャンティイの城。「こういう芝居は気分がいい」シェイクしたウォッカ。着物姿の女。和風の部屋、木のお風呂。日本式スパ。白亜の館。はしご車。愛の最中の男女の不意をつくパターン。おかしなポリスマン。シリコンバレー。金門橋。

16話『殺しのライセンス』

ティモシー・ダルトン。ハバナ、カリブ海。ヘミングウェイ記念館。イスマス・シティー。海辺の豪壮な館。Qの大活躍。「せっかち（性急）なのね」「君が待たせるからさ」

17話『ゴールデン・アイ』

雪のロシア。素敵に心躍らせるアクションの荒唐無稽（リアルな荒唐無稽）と、女性Mなどのおかしな生活感。「当てこすりは二人の娘たちのだけでたくさん」わくわくする活劇の大仰と、ふとした会話にほの見える日常のささやかさ。クールでエレガントな振舞と会話。「前戯はここまで」モナコ(?)。ヨットハーバー。カリブ海。（エキゾチシズム⇒映像特典参照）。マティーニと美女。「はったりも諜報活動の武器の一つ」

18話『トゥモロー・ネバー・ダイ』

Mの言葉遊び。洗練と優雅。ハンブルク。「大人になれば、007」昔の恋人。ボンドお得意の嘲笑のための精神分析。超高層のこれ見よがしのビルを見て、「短小コンプレックスがあるらしい」ベトナム、サイゴン。路地、街の日常生活の中を駆け抜けるオートバイの逃走。愛の場面に飛び込むシーン（性的な午後、薄明かりの室内のベッドの快楽が連想される）。墮落した西欧の女たらしの諜報部員。

19話『ワールド・イズ・ノット・イナッフ』

スイス、ジュネーブ。ロンドン、テムズ川。アゼルバイジャン共和国。雪山。カスピ海を臨む街、バクー。「あなたの生き残りのこつは?」「美しいものを愛すること」カザフスタン。トルコ、イスタンブール沖合の（有名な?）灯台。乙女の塔。蒼い黄昏時。「運命に触れよ、思い切って」夜空を彩る花火が欲望を照らし出す。「プレゼントを開けてみる?」

20話『ダイ・アナザー・デイ』

キューバのハバナ。良き退廃時代の品物。リゾート気分。ロス・オルガノス島。ロンドン。「秘密は地下に埋めるのが一番」

*何話か上の記述にはないものがあるが、007シリーズのDVDそのものは全部持っている。ワクワクしながら観たものだ。

107 今村昌平『赤い橋の下ぬる水』

*記述なし。今村昌平作品はいくつか持っている。

108 アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ『アモーレス・ペロス』

運命が交差する瞬間。闘犬。

109 アルフォンソ・キュアロン『天国の口、終りの楽園』

「退屈が二人の日常になった」

*惹かれるタイトルだし、好きな映画。

110 デビッド・クローネンバーグ『イグジステンズ』

「安全だけど退屈だわ。ゲームの世界に戻る？」

*買取価格370円。

『スキャナーズ』

*記述なし。

『スキャナーズII』

日本人監督の名前を書いた札がいっぱい下がっている通り。他人の心をスキャンする能力。自分の意志を送り込み他人をコントロールする能力。

『スキャナーズIII』

*記述なし。

『スパイダー』

母親のブルーのシュミーズ。悪夢の闇。浮上する記憶。蜘蛛のように糸を張り巡らせた部屋。

*クローネンバーグの映画は、悪夢の連鎖というか錯綜に怖いけれども惹き付けられる抵抗できない感じが好きだ。

111 ビリー・ワイルダー監督『失われた週末』

アルコール依存症の男。「精神は舞う、砂袋を捨てた気球のように」

*ピエール・ロチ作品におけるアルコールの問題を思い浮かべた。

112 フリッツ・ラング監督『暗黒街の弾痕』

二匹の蛙（離れられない男女の隠喩）。犯罪雑誌好きの宿屋の亭主。犯罪者に対する世間の目。

113 マナ・ガルス監督『エロティカ』

性に憑かれた女たちの証言。性を語る女たち。性のフ

ァンタスム。ポーリーヌ・レアーシュ（『O嬢の物語』の作者）、ベッティナ・ランス（写真家）。

114 カトリーヌ・ブレイヤ監督『処女』

A ma soeur

フランスの高速道。

*買取価格950円。

115 ティント・プラス監督『秘密』

ヴェニス（秘密の恋の快楽を味わうには）。ジュデッカ島の秘密の隠れ家（→ビスコンティ『夏の嵐』）。乱倫の館。「良心は快楽の中に消えた」恋の裏切りには復讐。（ロッセリーニの影響を明言。）

*いかにもといった日本語題名表記のいやらしいこと。買取価格1140円。

116 ロッセリーニ監督『無防備都市』

ドキュメンタリー性。危機的状況におけるユーモア（フライパンを手にも、「これで殴りました」）。

『ドイツ零年』

1947年。敗戦2年後のドイツ。破壊跡。馬を捌く群衆。落ちた石炭を拾う。生活苦。それぞれの事情。昔の教え子を使って闇商売をする教師。

*115の「エロスの巨匠」ティント・プラスもその影響を受けたと言うロッセリーニ。彼の映画はドキュメンタリー色が強いものばかりでなく、コメディ・タッチのものやユーモアあふれる軽快な作品など幅広い。私はそのDVDBOXを所有している。

117 ウォン・カーウァイ監督『花様年華（かようねんか）』

（「恋のムードで」）トニー・レオン、マギー・チャン。「屋台に行くにもおしゃれを」素敵なおチャイナドレス。

*チャイナドレスは私の妄想対象の一つだ。

118 ジョー・マ監督『ファイティングラブ』

トニー・レオン、サミー・チェン。当て逃げから始まる恋。牛モツ煮込み一筋。レストランの厨房内に用意されたテーブル席。「ディープキスしないのね？」タピオカ茶。「ドッグフードの味が」「もう一度試してみるかい？」（キス）。工程進行中。

*「アクリイにディープキスされるのも大変そうですね。そんなことわざわざ考えなくてもいいんだけどさ」（村上春樹『村上ラヂオ2』）「佳奈とキスし合った時のことを思い出した。佳奈の唇のやわらかさ、うねうねと動く温かな舌、時折、軽くあたる歯の感触、舌と舌、唇と唇がひとつに溶け合い、全身が唇から先にとろけていきそうになる」（小池真理子『Kiss』）

なってしまった。では、『花子とアン』みたいに、ごきげんよう、さようなら。

119 パトリック・ヤウ監督『ロンゲストナイト』
トニー・レオン。マカオの暗黒街。

120 ジェラルド・ジュニョ監督『バティニョールおじさん』
ナチス占領時代のパリ。
*ジェラルド・ジュニョは俳優としてのほうが知られているかもしれない。パトリス・ルコント監督の映画にも出ている（『映画は止める』参照のこと。）

121 ダニエル・シュミット監督『ラ・パロマ』
「視線の時間」という副題。沈みゆく夕日の湖にかぶさるタイトルバック。仕える愛の結末。男そのものではなく、男の「絶対愛」を愛するパロマ。「夕日のように命が沈んでいった」
*シュミット映画でいうと、『季節のはざまで』が印象深かった。DVD化を待ち望んでいるのだが・・・

122 BOX『アート・オブ・エロス』

メルヴィン・ヴァン・ビーブルズ監督
『ブルー・ブルー・ブルー』
命を助けた魔法使いに対して。「願いは三つ叶うんじゃないなかったのか?」「今は一人に一つさ、経費削減でね。古きよき時代のはなしさ」

デトレフ・バック監督
『エレファント・ネバー・フォーゲット』
小人に引かれる象。象の鼻で運ばれる女。命のお礼は一夜をその女と過ごすこと。逢い引きの夜に象に騎乗して訪れる小人。

スーザン・シーデルマン監督
『マリッジ・ブルーの愉しみ』
男性ストリップ。絵の中の男に恋する女。

ヨス・ステリング監督『ウェイティング・ルーム』
ブルーで身を纏ったブロンド美女の痴態。
*改めて告白するまでもなく露呈していることではあるだろうが、エロスという言葉にバヴロフの犬みたいに即座に反応してしまう。DVD『実相寺昭雄コレクション（エロス）』の買取価格は7000円。実相寺昭雄というとウルトラマン・シリーズの監督として知られているが、エロスを撮った映画もある。私好みではなかったので、売り払ったのだろう。何にでも好みが影響する。

さて、終わりの時が来た。DVD鑑賞と刺激的で官能的な夜を共にしてくれた女性との夏は遠い過去のこと